



六花 7

俳句雑誌りつか
2018（平成30年）
cover design ichigo

山田六甲

沸点

道

人界をつき抜けられず夏雲雀
海に降る星は鳴門の洗鯛
沸点の低くありたる夏雲雀
花眼にも星見えて来し梅雨晴間
猫の手をするりと躲したる蜥蜴
みささぎに渡る橋なしひでり梅雨
風神雷神の切手をなめて梅雨籠
ほうたるの一つこそ闇美しき
木を積んで仏師は梅雨に籠りけり
木下闇種が浜には勝りたり



政子にねだる

水無月の外郎ありと手にしたる
須磨寺や卯の花寿司を中食に
わき道に糸瓜の花の風細し
梅雨晴の須磨霊水に口漱ぐ
上中下使ひ分けあふ霊清水
一の谷駈け下りて来し噴井かな
首洗ひ池の鯉にも梅雨晴間
糸瓜咲く須磨の細道上りけり

「須磨千鳥主宰」矢村三生先生に偶然

涼風や三生先生笑顔にて

雪嶺抄

ぬり絵

笹村 政子

花屑や城を巡れる手漕ぎ舟
白壁の映る限りを蝮の道
工事場にまだ人の影月おぼろ
廃園の札下がりをり八重桜
花屑の掃き残されし色舞へり
のどけしや父の蔵書にわが句集
春惜しむ夫の遺せしぬり絵して
杉戸絵の象のうごめく朧かな
花冷の娘に送らるる家路かな
街路樹の上枝のゆれに夏の月

高華抄

鳥帰る

佐津のぼる

山なみの隠れなき日や鳥帰る
芦芽ぐむ潮はしづかに満ち来たり
まなかひの島のけぶれる菜種梅雨
うぐひすのはるかの次の声を待つ
引き潮に海の遠のく實朝忌
蛇穴を出でて伸びきる自在得し
ともりても暗き堂ぬち桜冷え
せんせいに返事ほめられ入学児
見えにくき辞書の細字も春愁ひ
昼風呂の軍歌きこゆる昭和の日

ぬかるみを行つたり来たりして燕

赤松有馬守破天龍正義

ぬかるみを行つたり来たりして燕

青鷺の一足三足忍び足

水音のひとときは高き目借時

芝生なる蓮華たんぽぽ棲み分けり

しなだけでやがては縮む野蒜かな

ぬかるみをいつたりきたりしてつばめ あかまつありまのかみはてんりゆうまさよし

燕が泥濘へ来て泥を食み再び飛び去つてゆく。それを何度も何度も繰り返す。燕の親がせっせと土運びをして巣作りに励んでいる光景なのだ。

巣を作つて雛を返し、雛が生まれたら、子育てに励みせつせと虫を運んで与える。その姿を想像し、親の苦勞に思いを馳せているのである。泥を食む燕に心の中で「がんばれよ」とエールを送る。赤松有馬守破天龍正義はこういう人情に篤い秀句をときどき詠むから女性に人気があるのだ。

新緑の山に溶けあふ風の音 溝渕 弘志

しんりよくのやまにとけあうかぜのおと みぞぶち ひろし

入学生振り返りつつ門潜る

花びらを付けしまま傘差してをり

新緑の山に溶けあふ風の音

二階より手を出してみる春の雨

葉桜や大樹に膨れ川覆ふ

新緑は見ているだけで清々しい。新緑に風がふくと、風に揺れるみどりの若葉は一層新鮮な輝きを放つ。若葉にも濃淡さまざまな彩があり、その濃淡に風の音が清かに溶け込むと感じたのが詩。風が溶け込むことによつてますます匂い立つみどり美しい山に生まれ変わって万緑へと進むのである。もちろん作者の心に耳から新緑に染まっているのが読み手に伝わってくる。視覚と聴覚の融合した秀句。「溶けあふ」がいい。

新緑の山に溶けあふ風の音 溝渕 弘志

しんりよくのやまにとけあうかぜのおと みぞぶち ひろし

入学生振り返りつつ門潜る

花びらを付けしまま傘差してをり

新緑の山に溶けあふ風の音

二階より手を出してみる春の雨

葉桜や大樹に膨れ川覆ふ

新緑は見ているだけで清々しい。新緑に風がふくと、風に揺れるみどりの若葉は一層新鮮な輝きを放つ。若葉にも濃淡さまざまな彩があり、その濃淡に風の音が清かに溶け込むと感じたのが詩。風が溶け込むことよってますます匂い立つみどり美しい山に生まれ変わって万緑へと進むのである。もちろん作者の心に耳から新緑に染まっているのが読み手に伝わってくる。視覚と聴覚の融合した秀句。「溶けあふ」がいい。

雪卿集 せつけいしゅう

永田万年青

藤生不二男

遠足の玉子焼きあり母遠し

とりあへず打たねば落つる紙風船

玉砂利の足跡乱れゐる彼岸

巢燕や納屋壊さるる噂あり

楼門の声明るかり仏生会

さざ波のルルと鳴きゐる春の鴨

花万朶母にじやれゐる子を写す

とらへたる空の一点揚雲雀

盃に入りし花びらごと干せり

流れんと廻りはじめし花筏

青鷺の首から歩み始めけり

囀の沼にこぼるる光かな

山藤の散りつづきをり緋毛氈

坂の上の屋根の見えゐる桜かな

蒲公英の木椅子の後ろ群れてゐし

降るとき夜のおぼろを帰りけり

出口 誠

志方 章子

酒入りて元気がいいぞ花見客

弟が兄を見送る卒業式

土の上ピンクあふれて桜散る

春灯の煌めく島に目を逸らす

六枚の花びらありて里桜

六道湖の夕陽思へり蜩汁

これからで開かむとするチューリップ

掌にふはりと掴む春の土

チューリップ自己主張する川の土手

対岸の烟りてゐたる桜の芽

芝桜ピンクのふちを白がとる

水温むと誰か言ひたり確かめぬ

八重桜ピンクの玉となりにけり

かざしつつペンペン草を鳴らしけり

日曜は蝶だけのもの幼稚園

連翹の花よと一人ごと言ひぬ

升田ヤス子

玉つばき崖際に落ちとどまれる

玉垣に水笛吹く子春祭

田の水の満々と蓮植ゑらるる

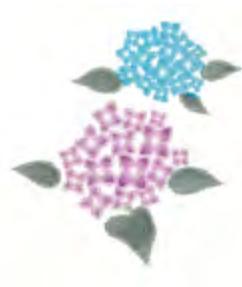
白昼夢とはこの桜吹雪かな

古井戸の釣瓶上げある桜かな

堰にあれば色いや増せる花筏

花あけび雄花雌花の雨しづく

桜しべ帽子に降りし音一つ



雪樹集

住田千代子

露の臺おや指姫の生まれけり
青饅の当り鉢にて和へらるる
花好きな母似の手つき菊根分
目の覚めるほどに濃きかなヒヤシンス
浮島にしぶきを高く雪柳
甘藍の玉をざつくり切りにけり

廣畑 育子

花橘丹波篠山武家屋敷
夕鴉屋敷の奥の緋木瓜かな
花青木お徒士屋敷の片隅に
外濠の縁をいろどり菖蒲の芽
花筏逆巻く風に流さるる
骨董屋ゆすら咲かせて和裁好き

田尻 勝子

桜吹雪老人ホームに音の無し
宙にある地球のどこか花咲ける
春光や大石未だ温もらず
七十六を七十五と言ひ花の下
それぞれの木々の主張や山笑ふ
パンゲアを吹き割りてをり春嵐

平居 滯子

春一番玉葱小屋のがらんだう
玉葱を吊すべランダ我が新居
墓石を割りし老樹に芽立ちあり
自転車の背につかまりて春の月
桜蔭降れる露店の古本屋
藤棚に虫の訪れ引きも切らず

谷口 一献

三鬼忌やたまにはひねもす嘯かず
懐石の小さき桜餅残す
来し鳥の尾の白かり藁ゆる
春愁や風に転がる紙コップ
春深し万事休すも夢覚めず
良き結果待たることも暮の春

赤松有馬守破天龍正義

ぬかるみを行つたり来たりして燕
青鷺の一足三足忍び足
薔薇の花二輪三輪あゝ五輪
水音のひときは高き目借時
芝生には蓮華たんぽぽ棲み分けり
しなだけてやがては縮む野蒜かな

溝渕 弘志

春のシャツ笑顔満面溢れをり
入学生振り返りつつ門潜る
花びらを付けしまま傘差してをり
新緑の山に溶けあふ風の音
二階より手を出してみる春の雨
葉桜や大樹に膨れ川覆ふ

延川五十昭

山藤に透けて櫓の一つかな
しやぼん玉追ひかける子の赤帽子
古池に映れる社つばめ切る
手のひらに藤のひとひら乗せてみる
玫瑰のひとひら散りし白砂かな
古伊万里の蛸と猛者もさえび盛りてあり

六花集



七月到着順

小林はじめ

花蘇芳小枝も幹も花纏ふ
いとざくらは花の大滝揺らしをり
春の星そこはかとなく色にじむ
新茶かな邸沽券やしきとけんの香の充つる
邑も野も静かに梅雨つゆ入り始まりぬ

大内 幸子

大蟻の身丈に余る獲物曳く
巻頭句グラスに彫りて花の昼
立話覚悟の泪彼岸来る
育つのも老ゆるも速し花は葉に
電線に尾羽根ふりつつ初燕



山田六甲

螢雪譚

岸 玉砂利の足跡乱れゐる彼 —— 万年青

彼岸とだけいえば春。この人は写生一辺倒で、ずっと続けられるヒト。モテる男の魅力の一つに「信念がブレない」がある。玉砂利は神社仏閣の境内や参道に綺麗に敷いてある小石。その玉砂利を彼岸（春）に沢山のヒトが踏むから敷き詰めた玉砂利が乱れた。「玉砂利」には、那智黒、新那智黒、大磯、南部、五色石などがあるというが単に玉砂利というと白石をさすという。

降るごとき夜のおぼろを 降りけり 不二男

「降るごときおぼろ」を見つけたとき不二男は手応えを感じたであろう。わかったようなわからないようなところが甞。書でいえば「垂らしこみ」の技法で、たっぷり墨を含ませた筆を置いて墨をにじませると、その先に水の部分ができそこへまた、筆を置くと意図しなかった模様ができる。その技法を俳句に使ったのである。いや授かったのである。甞すぎる「如き」でなく甞が降ってきたではだめなのだろうか。最終的には「好み」によるが……。

園 日曜は蝶だけのもの幼稚 誠

この捉え方はいい。たしかに日曜日は子どもたちもいないし、蝶にとつてこの日はかりは脅かされることなく自由に園内を飛び回って遊ぶことができるのだ。もっとこの句をよくしようと思えば、例えば日曜の幼稚園に蝶が飛んでいる、とだけいい、読者は、「ああ子供たちが休みで幼稚園を独占できるのだなあ」と誠句のように鑑賞してくれる。つまりこの句は読み手の鑑賞するところをすでに詠んだということになる。そこを隠せるようになれたら素晴らしい俳人になる。主宰はそのことがわかるのに30年かかった。正確には七十四年。